

高齢期の心臓病は後の認知症リスクを増大させる

心臓血管病の危険因子の多くが、認知症やアルツハイマー型認知症のリスクを増大させることが知られているが、心臓病が及ぼす影響については不明なままである。そこで本研究では、認知症やアルツハイマー型認知症の長期リスクについて、中高年期の心房細動、心不全、冠状動脈疾患との関連を住民ベースのコホート研究を実施し、25年以上追跡した。

被験者 2,000 人のうち、1 回以上の追跡調査を受けていたのは、1,510 人 (75.5%) であった。そのうち認知症との診断を受けていたのは、127 人 (8.4%) であった。全因子補正後の分析の結果、高齢期の心房細動は認知症およびアルツハイマー型認知症の独立危険因子であった (危険率はそれぞれ 2.61、2.54)。高齢期心不全についても同様に、認知症およびアルツハイマー型認知症のリスクを増大させる傾向がみられたが、冠状動脈疾患ではみられなかった。中年期に診断された心臓病は、その後の認知症やアルツハイマー型認知症のリスク増大と関連していなかった。

以上の結果から、高齢期の心臓病はその後の認知症やアルツハイマー型認知症のリスクを増大させることが示された。心臓病の予防と効果的な治療は、脳の健康や認知機能維持の観点からも重要であろう。

出典 : Journal of Alzheimer's Disease. Published online before print May 13, 2014

DOI: 10.3233/ JAD-132363